

針葉樹会報

1985. 6. 第65号



針葉樹会報 65号 目次

身辺雑記 吉沢一郎 1

山に忘れた上衣 柿原謙一 3

大国見山 石原修 4

ワイナ・ポトシ峰登頂

—— 後編 —— 中島寛 6

編集後記 11

表紙写真説明

ワイナ・ポトシ峰 (右が主峰・左が南峰)

中島 寛氏より

身辺雑記

——今から五十八年前——

吉沢一郎（昭和3年卒）

この記事を書こうと思ったら、またハタと電話で知らせてくれた。

困ってしまった。ペンちゃん（村尾君）と土湯峠を三月にスキーで越えたことは覚えていたが、それが大正か昭和かも忘れてしまったし、同行者がペンちゃんの他に誰かいたようだったが、それも思い出せない。

そこでまた奥の手を使う。カンちゃん（望月君）にテレした。会社の方へかけたら、火曜と木曜が御出勤日になっております、という女性の声。

次に境の方へ電話。いた。山溪に頼まれている原稿を今書いているところ、という。それにも関わらず、早速調べてから直ぐ連絡しますと。カンちゃんはペンちゃんの記録を殆んど全部整理してあるが、その原稿は多分、コンちゃん（近藤君）のところにあるからとて、大磯に連絡し、結論を昨日（六月十日）

治場廻りみたいな旅行である。

とかく古い人間はいつも、昔のことを言ったり、書きたがるものだといわれているが、私もその一人にいつの間にか、なってしまったのであろうか。私だって昔から古かった訳ではない。今でもまだまだ若い積りでいるのだから、多少古いことをいじくり廻わしても、そう非難されることはあるまい。

× × ×

冒頭に五十八年前という数字を出したのは、私が東北の吾妻山群の一角に触れた最初が、五十八年前ということを書いたかったからである。

古きよき時代だったからであろう。私らが商大予科の三年を終えて本科一年（角帽）へ試験もなしに、自然移行する寸前であつた。その時の行程は、

上野、遠刈田、峨々温泉、蔵王刈田岳、熊野岳、峨々、板谷、五色温泉、青木小屋、家形山、一切経（中腹を捲く）、微温湯温泉、土湯温泉、土湯峠、横向温泉、沼尻温泉（田村屋）、川桁、帰京。

となっている。これではまるで老人組の湯

この四月頃に二本松の大内君（郡山のNHK勤務、郷土史研究家、福島商高山岳部OB会、最近日本山岳会入会）から電話と手紙が来、もう冬眠もあけたでしょうから、今年は一切経と東吾妻へ登ることに決めました。まあ冬山の積りで仕度をして来て下さい、とのこと。その他細々したことの注意。

五月二十七日（金）の会津若松行（あいず号）はすいていた。四時頃郡山着。近頃は年

のせい、か居眠りで下車駅を通り過ぎてしまうことがよくあるので、二十分ぐらい前から眼を皿のようにして外をみている。今度は大丈夫だった。

下りるとOB会の佐藤君と、幅広い白の帽子と、これまた真白いツープースの、何々妃殿下といたいような清楚な女性が近寄ってきた。去年谷地平小屋、東大嶺、滑川温泉行

に、血圧計や各種薬品をもって一緒に来てくれた今泉さんだった。彼女は郡山の総合病院に勤めている、まだうら若い新米へと自分では

はいつていたの看護婦さんである。今年、明日友達の結婚式があるのでお伴出来ないが、来年は是非御一緒したい、とのことであった。今日は病院の方を都合してわざわざ来てくれたらしい。

駅のそばの、大内君が指定してあったコーヒー屋へ行って彼氏を待つ。一時間ほどすると階段に音がして、小兵だがガッチリした大内君があがって来た。丁度一年振りだ。元気で精悍な顔つきは変わらない。安心する。

しばらく雑談を続けてから、コーヒー屋の

前で佐藤君と今泉さんに別れ、私は大内君について駐車場まで歩く。

郡山は地図ではわからないが、平らではない。寧ろ坂の町と言っている位だと。NHKに一寸寄り二本松へ向う。郊外へ出ると懐しい安達太良が左手に霞んで見える。あの頂稜に見える凸凹はここ二、三年の間にもう全部登らせてもらった。

大内君の家までは四十分ぐらいかかる。彼の家は市役所へ入る右手の角、お父さんの代からの種屋さんで、お茶も扱っている。私

はこれで三回目、御両親、奥さん（女性登山家）、嬢ちゃん、坊やもスポーツが好きで、皆元気がいい。向側の角の二十四時間営業のスーパーからは家賃が入るらしい。おじいさんの頃には、薩軍が会津若松を攻めに来た時、

徴発されて官軍の陣屋になったそうだ。（今の家の場所とは少し離れているが）。それからあらかぬか、絵や字の素晴らしい骨董品が時代の簞笥の中にぎっしりと詰っている。お父さんは若い時、安達太良や吾妻は言うに及ば

ず遠近の山々をテントを担いで登りまくり、

モデルを使っているモード写真は先覚者の一人であるらしい。御自分の登った山々の記録は写真を貼ったりして克明に整理されてある。アラスカへも行っている息子さんの山好きも故なきに非ずか。

（続く）



山に忘れた上衣

柿原謙一（昭和12年卒）

ちかごろ物忘れがひどくなった、と気付いてはいたが、六月一九日に奥多摩は水根沢谷の林道に、紺背広の上衣をおき忘れた。

同行した山田さんが、数年前にメガネを二

回ほど山路におき忘れたことがある、と云つて僕をなくさめてくれた。メガネは必需品ではあるが、小物である。大物の上衣を置き忘れたとなると、お年のせいというほかあるまい。惘然とした。

第一、忘れたのに気づくのが遅い。昼食をすませた一時半すぎに、五万分一の五日市地図で、榎ノ木山と六ツ石を結ぶ道が林道とT字型交叉をする場所まできて、気がついた。それまでに休憩は二回だったから、そのどれかでおき忘れたのだろう。小遣や定期乗車証は、すべてその上衣のポケットにある。帰りに拜島駅前で恒例の一パイはもとより、乗車

「五千円用立てますよ」。「それはどうも有難い」。これで奥多摩行きバスに乗る。

拜島駅で下車。なじみふかい駅前の赤提燈は、日曜なので休業。ちかくのそば屋に入つて、地酒二本を酌みほした。

暗くなつて八時すぎに、自宅の玄関に帰りつく。家内がでてきていきなり、「背広があったそうです」、「エッ!」、「二時すぎに電話があつたんです、山女釣りにゆかれた清瀬市の〇〇さんが、帰り道で拾われて持ち帰られており、明日にも宅急便で送付することですよ!!」。これで万事判りました。

ああ、ありがたや。上衣もお小遣も、そして定期乗車券も戻ることになった。JACの会員証で、わが家が判つた由だ。

山女釣りの方へはウイスキーのお礼。山田さんへは、七日後の六ツ石山日帰り行のとき返金できた。あちこち迷惑をかけてしまったが、定期乗車券紛失届の必要はなくなり、恥をかかずにすみしました。

山田さん日く、「発つときに忘れ物はないか?の一声は、必要なですネ」。まさにそのとおりです。（昭和58・7・14）

大國見山

(オオグルミ) — 九州 —

石原 修 (昭和30年卒)

略図の内大臣橋より内大臣川に入り、林道 人だとのこと。九・五十分最奥の北の内部落を possible の限り南下しようと、タクシーで出発。も数軒の無人家屋が、壊れた雨戸の中に暗い国見山から五勇山を経て宮崎県側の上椎葉迄、室内を見せていた。これでないと一日では到達できない。

昔、九州を造った南北に延びる背梁山脈は、中央は阿蘇・九重火山群に潰され、南は霧島火山に呑みこまれてしまったが、その間に、人影の少ない広大な山地を残している。霧立

快な崩壊に立往生した。上からの崩れではなく、底が抜けて川底迄岩壁になっている。二ヶ月前から不通で、修復見通しは来年だとブルドーザーの若い衆は云う。恐縮する運転手も、山本旅館のお女将も知らなかったらしい、山乙女魚釣り以外は滅多に人の来ない処だから。三時間のロスタイムを覚悟で歩きだす。略図の内大臣部落の手前で軽自動車に乗った営林署の人に出合い、五キロ二ピッチ分ほど乗せて貰った。営林署氏の小生の一身を気づかうこと一方ならず、稜線は残雪があって指導標も道もはっきりせず、先週福岡大の生徒がその若さでも出直して来ると云ったという。この年では無理もありませんからと内大臣部落の入口で別れたが、部落に人の気配は無く、内大臣の谷の三十軒は過疎でなく、全くの無

・向霧立山地または五家・椎葉の山々という。その中心に山群の最高峯オオグルミがあり、北は不知火の海に注ぐ緑川、西は日向灘への椎葉の谷、南西は人吉盆地から直角に北上して九州の隠れ里を作る球磨川の夫々の源頭と

林署の人に合点、五キロ二ピッチ分ほど乗せて貰った。十四・十五分、残雪の中に、祠をのせた岩

五七年三月十九日。博多より特急で一時間四十分熊本着。バス一時間三十分砥用着。街道の埃で白い旅人宿「山本旅館」泊。

十四・十五分、残雪の中に、祠をのせた岩

三月二十日。八時山本旅館発——八・五〇内大臣川林道崩壊地点——十四・十五山頂。十六・〇〇五木川源流林道——十八・〇〇樅木部落。(霧と小雨。)

十六・〇〇、ぶな林から九州独特のくすの

めぐり会った。

この山地は頂稜は円く、尾根も平らである。やぶ山で植林も無いから野生動物も多い。谷は深く切れ、兩岸に数多くの滝をかけて支沢が合流している。平らな隆起面の褶曲が未完成なのだろうか、V字でなくY字谷である。

大八は鎌倉に出頭し処刑されたが、上椎葉には鶴富屋敷が保存され、「庭のさんしゅゆの木、なる鈴かけて」の稗つき節に、「那須の大八、鶴富かけて」と人々に謡いつがれている。縦の木部落の人々の墓も菩提寺も、峠を越えた椎葉にあるとのことであった。

せてやってくれ」と言付かったとのこと。峠越えは、車の暖房と人のなさけでホカホカと暖かであったが、九州横断に失敗した悔いが疼いた。

以上

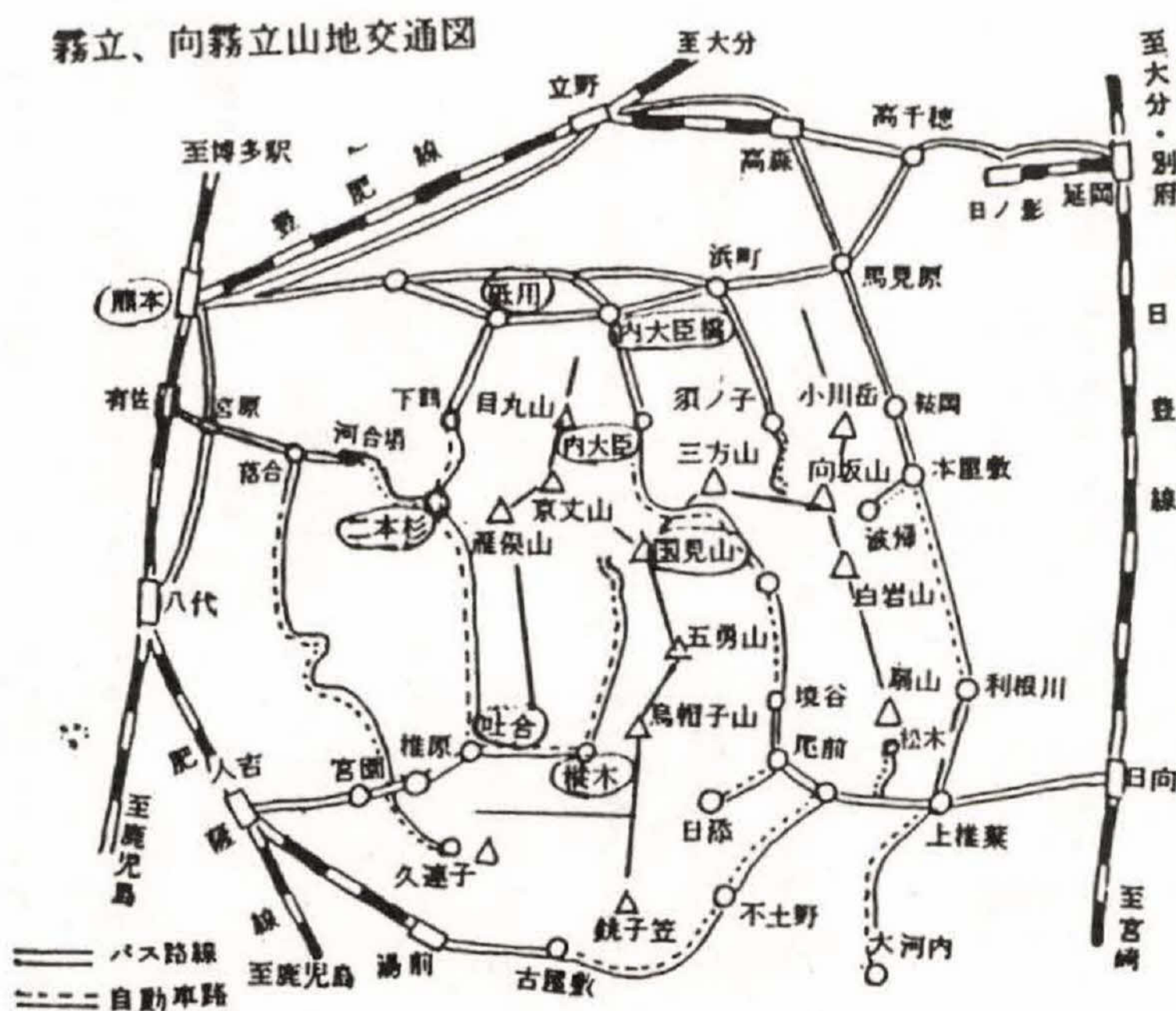
十八・〇〇、五家荘最奥の縦の木部落に至り、暗闇の中で釣人宿ヤマメ荘に投宿する。ヤマメの生造りと鹿の冷凍生肉を馳走になった。同宿の釣人二人は、釣れないので帰るという。宿の主人は、そろそろ養殖魚でも入れないと釣れない客が出て来たとのこと。

少してあるので、この隠れ里から出るには、西の熊本側にある千二百米の二本杉峠越え七時間コースが最も人里に近い。タクシーを砥用から呼べと云われたが、休日を二日残しているので五家の荘を見たいと答えて歩くこととする。

縦の木・葉木の二村は菅原道真の長・次男が、下流の三村は壇の浦生き残りの平清経の一族が開いたことは古文書で知られている。合せて五家の荘と称される。

吐合（合流点の意）から二本杉峠への谷に入る。ここから下流は五木川と称するが、八代や人吉からのバス停終点まで二十キロは歩かねばならない。再び登り出して五家の一

十三世紀のこと、壇の浦后、那須与一は頼朝に九州に逃げた平家残党の掃討を命ぜられ、弟の那須の大八を派遣した。落人の暮しの悲惨さに、あわれを感じた大八は、美女鶴富と椎葉に定着。頼朝の不興をかった与一は長男小太郎を急波し、叔父に一族の危急を告げる。旅のオッサン（九州弁）がいたら砥用まで乗



ワイナ・ポトシ峰登頂 — 後編 —

(一九八三年六月)

中 島 寛

(前号より続く)

三、ワイナ・ポトシ峰登頂

六月五日。今日はうす雲が出始めたが、相変わらず快晴である。風は次第に強くなっていく。前夜も「すきやき」で奥様の手料理をご馳走になり、ぐっすり休んだが、伊藤氏の食欲が相変わらず進まないのが気がかりだった。疲労感が残った。もう一日休養をとりたいところだが、後がない。ぎりぎりまでねばって、ラパスに滞在中の国立民族学博物館研究員・昼過ぎジープでラパスを出発。アルティブラーノに上がるとワイナ・ポトシの雄姿が真正面に大きくそびえて見える。北へ三〇キロ、ミルニ鉱山を越し、ソング・パスで車を降りる。高度約五六〇〇メートル。

今日もミルニから連れてきた三人のインディオの子供たちが荷物を担いでくれるので、われわれは軽装でよい。十五時、いよいよ歩

きはじめる。ダムのおちにつくられた水道路

沿いの細い堤防の上を歩き、左側から小さな

六月五日。今日はうす雲が出始めたが、相

変わらず快晴である。風は次第に強くなっていく。前夜も「すきやき」で奥様の手料理をご

馳走になり、ぐっすり休んだが、伊藤氏の食

欲が相変わらず進まないのが気がかりだった。

疲労感が残った。もう一日休養をとりたいと

ころだが、後がない。ぎりぎりまでねばって、

ラパスに滞在中の国立民族学博物館研究員・

昼過ぎジープでラパスを出発。アルティブラ

ーノに上がるとワイナ・ポトシの雄姿が真正

面に大きくそびえて見える。北へ三〇キロ、

ミルニ鉱山を越し、ソング・パスで車を降り

る。高度約五六〇〇メートル。

今日もミルニから連れてきた三人のインデ

ィオの子供たちが荷物を担いでくれるので、

われわれは軽装でよい。十五時、いよいよ歩

アタック日和だ。しかし、三人とも、身体の

調子はもうひとつ冴えない。気分は悪くない

し、登高意欲も衰えていないが、何となく、

すっきりしない。イチュ・コータ谷でまる一

日行動した後、休養をとらずに、いきなり上

がってきたので、疲労が抜けていない。伊藤

氏は、相変らずまともに物が食べられない。

黒山氏も身体が重いとのこと。僕は、昨夜も

ほとんど一睡もできなかった。寝がえりをう

ち、腹式呼吸をくりかえし、懸命に眠ろうと

努めるが、呼吸が乱れ、眠りに入れない。高

度順応が出来ていない証拠だ。ただ、脈拍は

あまり高くなっていないので、ホッとす。

マルティネスも、風邪が直らず、しょっ中、

鼻水をすすっている。

ともかく行けるところまで行ってみよう。

氷河の山だから、どこにどんな難関が待ちか

まえているかわからないが、撤退不可能の状

態に追いこまれさえしなければ、体力と気力

の勝負だ。今日は、下山の状態をいつも心に

かけながら登ろうと覚悟した。

午前七時半テント発。山本氏とポーターが

残る。前進キャンプ上のチムニー状の凹角を登り、急な岩尾根を登ると、氷河に出る。風が強く、さすがに寒い。アノラック上下を着用、アイゼンをつける。ここで写真撮影のために登ってきた渡辺氏と別れる。

氷河に出ると、広い雪原をひたすら右へ右へとトラバース気味に登る。小さなニエベ・ペニテンテが表面を覆っているが、その下は固い氷である。傾斜はゆるいが、アイゼンの爪がほとんどささらない位だ。しかし、ニエベ・ペニテンテがスタンスの役目を果たしてくれるので安心感がある。スピードはあまり上がらないが、登りはじめて暫くすると、陽がのぼり、気温が上がってくる。身体に血が通いはじめ、固さがほぐれ、次第にリズムをとり戻した。

マルティーンネスと僕がロープを結んで先行し、黒山、伊藤組が後続する。三〇分ほど登った頃、昨日、われわれに先行して入山したアメリカ・コロラド隊のテントが、右下に見えた。コールをかけたが応答なく、既に出発したらしかった。

この付近から、氷は見立たなくなる。しかし、雪がもぐり、踝上ぐらいのラッセルが続く。相変らず、広い雪原を、右上に向かってトラバースし続ける。

約二時間半も単調なトラバースを続けると、目の前に顕著な雪稜が見えてきた。出発点の貯水池のところからもはっきり見えた、南峰頂上からまっすぐ東に延びた尾根である。通常のルートは、この雪稜を正面から直登するらしい。しかし、マルティーンネスは、時間が遅いし、今日は雪の状態がいいから、このまま氷河のなかを、雪稜の左裾に沿って登り、尾根の一段上の鞍部に抜けるルートを試みてみたらどうかと提案する。その場合、尾根に抜け出るのに、かなり傾斜の強い硬い氷の露出した氷壁を登らなければならぬ。しかし、クレバスもあまりないし、難しさも、マルティーンネスが大げさに云う程大したことはないと判断し、この新ルートを登ることにした。帰伯後、渡辺氏から送ってもらった新聞（El Diario、六月十三日号）を見ていた

聞（El Diario、六月十三日号）を見ていた「ワイナ・ポトシに新ルート」という大

きを見出しのついた記事が載っていてびっくりしてしまったが、この程度のバリエーションは無限にとれるのが、コルディエラ・レアルの面白さとも云えよう。

尾根の左裾をまわりこむのに、ラッセルがきついのではないかと心配したが、思った程でなかった。しかし、体重の軽いマルティーンネスがアイゼンをきかせてぐんぐん登っているのに、僕の方はボソツ、ボソツと氷を踏み抜いて、苦斗を強いられたのはまいった。鞍部へつき上げる部分は、一部氷壁になっていたが、クレバスを利用し、スタカットで五ピッチで登りきった。

時計を見ると、もう十二時だ。うんざりしてしまふ。しかも、ここから更に大雪原が続き、頂上はまだ見えない。クレバスを縫いつつ、相変らず、右にトラバース気味に登り続ける。有名な「カンパメント・アルヘンティノ」は、この大雪原の下部にあり、昔は、モレーンを右へ右へとトラバースし、このカンパメントの下の氷河から取付くルートが一般的だった。

この雪稜のどんづまりに大きなギャップがあり、そこが最大の難関だと聞いていたが、気がつかないうちに通り過ぎてしまった。あるいは、雪稜をショートカットしたときに、ギャップもついでに巻いてしまったのかもしれない。

頂上に至るプラトールに出たのは、十四時だった。ここまで来ると、はるか彼方に頂上が望める。しかし、あまりにも遠い。その上、見上げると、首が痛くなる程高い。

ともかく歩かなくては着かない。ここも同じく広い大雪原状になっていて、長い。疲労のため、身体が重い。百歩歩いては休む。太陽は照りつけるが、風に体温をとられ、暑さは感じない。

ようやく頂上部分のピラミッドの下に着いたときには、陽が落ちかけていた。北峰（主峰）と南峰の科尔を目指す。クレバスが横に走り、氷が露出していて、近づいてみると、けっこういやらしく手こずった。スタカット四ピッチで広い科尔に立つ。十六時。主峰を目指して格闘中のコロラド隊の三人の姿が豆

粒のように見える。主峰を狙うとすれば、あと二〜三時間かかる。明るいうちに頂上に着くことは不可能だ。そうなれば、今、ここで

ビバークに入らざるをえない。誰も口にこそ出さないが、ビバークは必至と覚悟していた。しかし、疲労の程度から考えたら、ほぼ限度に近い。明日は何としても十五時の飛行機に乗らなければならない。いろいろのことを考えあわせると、同じビバークにしても、下山時が望ましい。「南峰にしよう」と云うと、あっさりとは皆が賛成した。

南峰の登りは、主峰程長くない。高度差にして、主峰までが四〇〇メートル、南峰までが一五〇メートル位だ。しかし、南峰への登りも急な氷壁に続いて、一〇〇メートル程の岩壁が待ち構えていた。四〇メートルいっ

ぱいで三ピッチ、思ったより傾斜がきつく、オーバー・ハンク気味の部分もあって緊張させられた。それでも、全力をふりしぼって最後の難関を突破し、頂上を獲得した、という気分は心地よかった。頂上に立ったのが十七時。はるか彼方にチチカカ湖の湖面が光り、

夕暮れのなかに、ライキマニの鋭峰が沈もうとしていた。

すぐに下山に移る。夜との競争である。しかし、南峰からの下降中、漢がトップで懸垂が解けて、約二〇メートル墜落してしまった。降りをはじめてすぐ、目の前でロープの結び目が解けはじめたのがわかったが、どうするわけにもいかず、早く途中の岩棚に着こうと必死に頑張ったが、駄目だった。「一巻の終わりか」と観念したが、一回転して、下の氷の棚で止まった。頭と腰を打ったが、何の怪我もなく、幸い無事だった。それよりも、ロープが抜けずに支点のシュリングに残ったのが幸運だった。まさに奇跡的に幸運に恵まれた

としか云いようがない。このままロープが一緒に落ちてしまっていたら、と考えるとゾッとす。長年登山をやってきたながら、こんなお粗末な事故を起こして、我ながら自分が嫌になってしまった。材質も太さもちがう二本のロープをテグス結びで結んだのだから、二重結びにするとか、もう少したっぷりと余り

をとる、といった一寸した気配りをすれば、防げた事故だった。夕暮れが迫り、焦っていたのかもしれない。しかし、山では、常に虚心かつ慎重でなければいけないことを改めて痛感した。

この事故があったために、コルからの下降は、一層慎重にする。そして、十九時三〇分、五六〇〇メートル地点でビバークを決めた。四人で、雪原のどまん中にフライをかぶって横になる。寝袋はないが、それほど気温は下がらなくて助かった。

マルティーンは、「寒い、寒い」と文句を云っていたが、事故のこともあって、僕はまん中に入れてもらった。お蔭で疲れていたこともあり、高所にもかかわらず、はじめて熟睡することができた。朝、目が覚めたとき、ようやく高所順応ができたな、と実感した。これがもう一日早かったら、もっと楽な気分

で登れたろうが、この高度になると、山も大きいし、そう簡単には登らせてはくれない。六月七日。今日も快晴。何としても、十五時・ラパス発の飛行機に乗らなければならな

い。七時、ビバーク地を後にする。長い、長い、長い、長い、あとがき

い登りだったが、下りは早い。雪原のなかはなるべく最短路を辿り、九時三〇分、前進キャンプ帰着。下から応援に来たポーターも、昨日中にわれわれが帰らなかったために、既に下りてしまい、自分たちで荷物を担いで下山しなければならなかった。それでも十二時にソングー・バスに戻り、待っていたジープに飛び乗る。飛行場に駆けこんだのは、飛行機離陸三〇分前だった。ソングー・バスから電話で連絡できたので、渡辺さんや山本さんが待っていて、手際よく諸々のアレンジをしてくれた。

相変らずの、せわしない、ドタバタ劇だった。しかし、限られた時間をいっばいに使って、力を出しきり、何とか目標のワイナ・ポトシ峰を登ることができ、満足した。機内では、一杯のジュース（残念ながらビールがない）を飲んで、心地よく、ぐっすり眠った。

1. アルティブラーノ（約四〇〇〇メートルの高度）を起点とするので、六〇〇〇メートル級の山でも、実際の登高差が少なく、かつ、首都ラパスからせいぜい三〇〜五〇キロメートルの近距離にあるので、短期間に登れる。（しかし、この点は、高度順応をする上では、マイナスに作用するので要注意！）

2. 鉱山開発のために開かれた道路が縦横に走っているお蔭で、車で簡単に山麓まで入れる。

3. アルティブラーノからアンデス山麓にかけては、インディオの故郷とも云うべき地域であり、どこに行ってもアイマラ族の部落があり、容易に彼らをポーターとして雇ったり、彼らの飼っている馬、ロバ、リャマ等をハイヤーできる。

4. 天候が安定していて、六月から八月までは原則として晴天が続く、天候に起因する危険を心配しないで済む。雪崩やヒドン・クレバスの心配も比較的少ない。

従って、僕自身も、短い休暇を利用して、これからも一年に一回は、アンデスの山登りを楽しもうと思っているが、一方ではもう少し、興味をもった人が沢山この地を訪れてもらいたいと、心から切望している。



○ 寄稿御希望の方は左記に御連絡下さい。

〒273 船橋市前貝塚町 266-3 MBK船橋寮 B-403
 (TEL) 0474(38)5691 (呼出)

(勤務先) 三井物産(株)鉄鋼総括部事務管理室
 システム統轄グループ
 (TEL) 03(285)2061 (直通)

宮下 克彦
 (会報幹事)

編集後記

針葉樹14号、及び復刻版11・13号の発行作業は順調に進み、資金面でも多くの会員の皆様より協賛を得、一応の目途がついたようです。

この65号の発刊が予定より2ヶ月近くも遅れましたことを深く御詫びすると共に、次号よりは若手OB・現役学生の活動近況をも含め、バラエティーに富む内容を企画しておりますので、皆様の積極的御寄稿を御待ちしております。

昭和六十年六月

宮下克彦

針葉樹会報 第六四号

編集人

〒273 船橋市前見塚町
二六六〇三

宮下克彦

発行日 一九八五年六月二十八日

発行所 針葉樹会

印刷所 東京和光印刷

